

撮影会作品コンテストは藤原氏に凱歌

— 出品者以外の第三者による審査を実施 —

小豆島撮影会作品コンテストは、6月例会日に行われましたが、撮影会地参加15名のうち13名の方が出品されるという出品率の高さでした。比較的編集期間が短く、まとめるのに皆さん大変苦労されたと思います。

審査は定刻までにお集まりの非出品者10名による、公平な審査が行われた結果は次の通りでした。皆いい作品が揃い、審査も激戦となりました。

- ・最優秀賞 藤原純三さん 「島の響」 16分53秒
- ・優秀賞 関 剛さん 「同行二人」 9分50秒
- ・秀作賞 安居利次さん 「小豆島の心根」 10分20秒
- ・佳作 河合源七郎さん「小豆島の春」 11分45秒、前田茂夫さん「伝統が息づく島」12分18秒、岡本至弘さん「小豆島紀行」11分53秒、合原一夫さん「小豆島は今も」13分55秒
- ・努力賞 森保信さん「小豆島点景」9分17秒、江村一郎さん「農村歌舞伎」6分50秒、吉岡貞夫さん「農村歌舞伎を支える人たち」15分45秒、奥さん「小豆島田植えの頃」12分24秒、江藤洋司さん「肥土山農村歌舞伎」6分11秒、進藤信男さん「小豆島農村歌舞伎を見る」14分58秒。

以上の通り決定し、会長より全員に記念品としてDVテープが贈られました。なお最優秀作品はOMC映像フェスティバルで上映の予定です。

■公開映写会は10月6日(第1日曜日)で、このほど阿倍野市民学習センターの講堂が確保できました。この日を目標に計画を進めます。

7月例会と研究会のお知らせ

7月例会は27日(第4土曜日)18時より、阿倍野市民学習センターで開催します。久しぶりに作品研究会も13時30分より行います(但し16時から世話役会のため16時まで)ので、こちらのほうもよろしくどうぞ。特に公開映写会に出品予定作品は、よりよくするため、助言や意見を求めて是非ご持参ください。暑い盛りですが会場は冷房が効いています。どうぞお越してください。

■予 告：10月例会は、第4土曜日が、学習センター主催のオータムフェアの関係で会場確保が出来ませんでしたので、やむを得ず第3土曜日（19日）になります。どうか手帳などメモにしておいて下さい。なお、同月は偶数月ですので、作品研究会の方も会場を確保してあります。

■訃報のお知らせ：元会員の越本吉太郎さん（享年84歳）が去る6月4日ご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。いつも奥さんと二人三脚で国内旅行され、常に奥さんが現場でマイクを持って説明をなさるといった独特の紀行作品をお得意とされていました。

6月例会のレポート

去る5月3～4日行われた小豆島撮影会作品コンテストに13本が出品され、上映順を決めるくじ引きの後、上映、出品者以外の第三者による公平な審査が行われました。

今月の司会は有村さん、書記、安居さん、デッキ係に江村さんと河合さん、受付兼照明係に安居良枝さんと奥さんの担当で会を進行しました。

■出席者：有村、江藤、江村、岡本、奥、上総、河合、合原、関、中尾、那須、西村、華岡、藤原、前田、増池、森、宮崎、安居夫妻、吉岡、渡辺、進藤、山本及び見学者1名の計25名（敬称略）。

小豆島撮影会作品短評（担当安居世話役）

1. 小豆島点景 森 保信さん

9分17秒

タイトル「小豆島点景」にぴったりのカットつなぎで、小豆島の要所、要所、を軽快に要領よくまとめられています。歌舞伎も三番叟に限定されしかも時間配分を約1分にされたことが全体の構成上非常によかったと思います。欲を言えば点景過ぎて、見ていて少々物足りなさを感じました。点景の中に森さんの主張がほしかった。難しい問題ですが……

2. 肥土山農村歌舞伎 江藤 洋司さん

6分11秒

前半に作者の農村歌舞伎に対する率直な感想と主張がはっきり述べられているのが光っていました。江藤さんは最近毎回作品に進歩があります。（偉そうなことを言ってすみません）制作意図が作品に感じられます。ただ、順序が逆になったのではないかと思います。前半のナレの主張を最後にもってくれば、ぐっと作品に重みが出たように思います。特に自分の趣味にかぶせて歌舞伎の練習風景を描いているところはよかったです。

3. 小豆島紀行 岡本 至弘さん

11分50秒

上手な紀行ビデオ作品の典型です。残石と遍路と歌舞伎が程よく配置されています。そして各項目に入っているナレは画面を納得してみせてくれます。素材の使い方もうまいです。違和感がありません。ただ最後の歌舞伎の部分はインタビューが長すぎたように思います。貴重な現地の音ですが大事なところ以外はカットされても意味は通じるのではないのでしょうか。そのせいか歌舞伎の最終部分のカットつなぎは少々荒くなっているように思います。前半これほどうまくつながっていたのですから……

4. 伝統が息づく島 前田 茂夫さん

12分18秒

インタビューを交えたこの種の作品は前田さんの独擅場（どくせんじょう）です。歌舞伎だけに絞られていますが12分余の時間を長く感じさせないのは、2人のインタビューをうまく使って構成の時間配分に気を配られたからでしょう。それにインタビューの内容が説明ではなく、個人的なことがよかったと思います。あえて言えば縮めの舞台はなしで作者の「伝統は受け継がれていくでしょう」の台詞で終わってほしかったのです。外の人も歌舞伎場面が多かったのでそれにまぎれていい作品なのに損をしていると思います。

5. 小豆島農村歌舞伎 進藤 信男さん

14分58秒

新人として一作毎にいい作品をお作りになる将来性のある作者です。この度は始めての一泊撮影会で素材がありすぎるのでま

とめるのに大変だったろうと思います。これも慣れで2~3回もすれば、うまくいくと思いますが。2、3この作品で気づいたことをいいますとはじめの部分の音処理（SEのぶつ切れ）、本番になってから舞台の進行とインサートカットのチグハグ、つまりインサートカットは舞台を見ている観客を入れてこそ盛り上がりますが、子供たちの勝手な行動のカットだと流れがおかしくなります。このあたりベテランの作品を参考にしてください。

6. 同行二人 関 剛さん

9分50秒

陽炎が立つ坂道のかなたからお遍路さんが現れて近づいてくるカット、時計で測ってみたら55秒の超ロングカットです。傍を通る自動車が趣を添えタイトルまでのつかみが、ドキモをぬきます。ノンナレでしかも、ただただ、歩くシーンの連続。途中のダレもなく10分近く引っ張っていく構成とカットつなぎは、さすがと感心しました。ふと気づくとBGMにあわせたカットつなぎ、心地よい気分になってみえますと宿の女主人の顔のアップがだんだん大きくなります。幻想的なローソクの火のカットのあと、女将の顔が般若心経を唱えおわり作品もエンド、やっぱりすごい作品です。カットつなぎを体で体得されているのですね。こんな作品を作れるようになりたいと思います。

7. 島の響 藤原 純三さん

16分53秒

なんといっても娘さんのナレが作品全体を引っ張っていきます。それに作者のこだわりが全編にわたって息づいています。音も地図も解説も。歌舞伎の本を買って見せ場の研究までやった作者の意気込みにはまいました。お遍路さんから歌舞伎へのつなぎもスムーズです。ところがやや専門的過ぎるところが、全体のバランスを少し崩しているようです。たとえば「くどき」の解説はタイトル「島の響」のイメージからはみ出しているようにおもいます。歌舞伎の筋の解説も必要かもしれませんが作品が長くなる原因でしょう。大事なカットでしょうが、思い切って省略したらまた違う

センスのすばらしいものになるかもしれません。

8. 農村歌舞伎 江村 一郎さん

6分50秒

導入部分のカットつなぎは江村流が発揮されていました。狛犬のアップから舞台へのターンは江村さんならではの撮影方法です。しかしそれ以後は如何せん舞台はどこからとってもあまり変わりませんし、素材は一緒ですので江村流の編集効果が発揮できなかったのが残念です。関さんのようにお遍路さんを題材に選ばれた方がよかったです。それには、初めからの絞って撮影する気構えが必要です。あの時の状況からは満遍なくとってきてそれからさあ何にしようかと決める段階でしたから江村さんにとっては実力が充分だせなかった環境だったと思います。残念でした。

9. 小豆島の春 河合 源七郎さん

11分45分

かなり詳しく下調べされているのでナレの中で撮影に行った者でも知らなかったことがたくさんありました。この度は材料が豊富ですからどの題材を選ぶか、選んだ題材のどの部分に比重をかけるかが構成上大事です。作者は遍路と歌舞伎をチョイスされましたが後者に重点をおかれています。そしてよかったのは素材の扱い量が比較的少なく現場の歌舞伎をアップでうまく撮っておられるところです。アップで撮るとそのあたりの歌舞伎の進行をどう表現するか難しいのですがうまく処理されていました。「小豆島の春はお遍路の鈴の音ではじまります」という出だしのナレは非常にいいのですがタイトルの『春』がそのあとあまり表現されていないように思いました。

10. 小豆島田植えの頃 奥 宏さん

12分24秒

この作品も遍路と歌舞伎をあつかったものです。小豆島の紹介の後、遍路に入りますがこの部分2分半ほど素材だけを連続使用しておられます。やはり素材は素材ですので使い方をご自分の撮ったカットの中にまぜながらつないでほしかったと思います。歌舞伎の分は素材の使い方はよかったです。歌舞伎の撮影も丁寧に撮られていま

した。昼の部から夜の部に移る場面転換を会場のロングカットにフィルターをかけて試みられたようですが、これは流れを一時止めますので単純なトランジションのほうがよかったかなと思います。

11. 小豆島の心根 安居 利次さん

10分20秒

はじめは根性としたのですが、少し柔らかく心根としました。残石、歌舞伎、遍路の歴史をたどればみんな17世紀初頭にぶつかります。石切場の経済効果が小豆島の文化を花開かせました。大阪城完成に伴うバブルの崩壊で出稼ぎの人達が島に定着しました。花咲いた島特有の文化を今度は持続さず粘り強さにかえていったのです。それを支えた精神的バックが般若心経。それを軸にまとめたのですが、力不足でうまく表現できませんげした。

12. 農村歌舞伎を支える人達

吉岡 貞夫さん 15分45秒

タイトル通りの内容で全体の構成は作者のナレとあいまって非常によかったと思います。

問題は素材の扱いです。タイトルからして練習風景は必須ですが、素材だけに頼るカットの連続はナレがあったとはいえ、少し気にかかりました。当日の作者自身によるカットの構成を中心に素材はあくまでそれを補うカットとして使ってほしかったと思います。でもタイトルが支える人々ですから、素材のなかに使いたいカットが多くあるのと50%までならいいかと、つい使ってしまう心理はよくわかりますが……難しいですね。

13. 小豆島は今も 合原 一夫さん

13分55秒

「30年前に訪れた島、殆ど記憶になかったが24の瞳の像を見て、少しずつ思い出した。」いつもの合原節で島遍路や残石のこと、農村歌舞伎のナレがつづきます。作者のナレの特徴は主張と感情が入ることです。説明に陥りやすいナレに息吹をあたえます。全体を網羅しながら描写して最後に「30年まえの印象とは一味違った奥の深さを感じさせてくれた旅であった」で結ばれました。構成がやはりうまいです。見

ている人をひきつけ感情移入させ中に入り込ませるコツを身に付けておられるようです。筆者の創りとどこか合い通じるものがあるようですので、そのコツを吸収したいと思っています。

以上、上映の後、出品者以外の第三者による公平な審査の結果、藤原氏をトップに関氏、安居氏の入賞者が頭書の通り選出され、会長より記念品としてDVテープが贈られました。9時過ぎ、二次会場へ移りました。

コンピューターウィルス

寄稿 安居 利次

自然界のウィルスは、DNAが他の細胞にはいり、その中で、自己増殖する。コンピューターウィルスも同じような行動をするので困ってしまう。最近感染したわがPCはWORM.KLEZ.Hというやつで、アドレス帳の中からランダムに選んだ相手に対してウィルス付きのファイルを添付して私に断りもなしに送ってしまう。名前を騙られた発信者も迷惑至極である。ウィルス予防策をとっていた友人が、経路を推定して、知らせてくれたので大きな騒ぎにならなかったが知らずにいたら、多大の迷惑をかけていただろうとひやりとした。

自然界のウィルスは、一度かかるとたいてい、免疫がつく。ワクチンの摂取で予防もできる。PCウィルスは免疫がつかない。勿論、予防対策はあるが絶えずバージョンアップをしないと新種のウィルスは見逃してしまう。新バージョンのものでも駆除や隔離が出来なくて、見つただけで「処理できません」と来る。特殊の処理をおこなって削除したら、ウィルスはなくなったが、システムの一部も一緒に削除したらしく、編集操作の一部が出来なくなった。自然界のウィルスの起源はいまだ謎である。しかしコンピューターウィルスは心無い人間の意図的産物である。こんな非人間に倫理は通用しない。ファイル付きのメールがきたら知人でも開く前に本当に送ったかどうか確かめておく必要があるようだ。